

ロバート・G・キース著

『征服と農業変化——ペルー沿岸地方におけるアシエンダ制の出現——』

Robert G. Keith, *Conquest and Agrarian Change: The Emergence of the Hacienda System on the Peruvian Coast*, Cambridge, Mass., Harvard Univ. Press, 1976, 176p.

I

ラテンアメリカにおける低生産性および所得分配の不平等に見られる低開発性は、アシエンダに代表される大土地所有制に根ざしていると言えよう。このアシエンダの起源およびその機能をめぐる問題は、ラテンアメリカにおける生産様式論争とも絡んでラテンアメリカ経済史における一大争点となっている(注1)。アシエンダの起源については、スペインによる征服に続く植民形態であるエンコミエンダとの関連が問題となる。両者の制度的関連については、エンコミエンダ制は土地所有を伴わないとするサバーラ (Silvio Zavala), シンプソン (Lesley Simpson) 等の研究により否定されている。しかしエンコメンデロ (エンコミエンダ受領者) は土地獲得に有利な立場にあったこと、およびエンコメンデロとアシエンダ所有者の間に血縁的なつながりがあることは、多くの研究者が指摘するところである。ロックハート (James Lockhart) はこうした現実認識から、サバーラの研究を踏まえた上で両者の社会経済的関連を見ていくべきだと主張している(注2)。またアシエンダの機能については、封建制下の荘園的な自給自足経済として捉えるタンネンバウム (Frank Tannenbaum) とエンコミエンダ、アシエンダに一貫して商業的機能を見るフランク (Andre Gunder Frank) を両極として、さまざまな見解が提出されている(注3)。この問題もその発生過程を通じて明らかにされるべき性格のものであろう。

本書の著者であるキースは、1971年『ヒスパニック・アメリカン・ヒストリカル・レビュー』(*Hispanic American Historical Review*, 略称 *HAHR*) 誌に発表した論文において(注4)、両制度の構造的な連続性と非連続性を明らかにするという主旨のもとに、次のような分析を行なった。

理念型としてのアシエンダは、土地所有権に基づき、

伝統社会から独立した生産機構であり、商業的機能を有するものである。一方理念型としてのエンコミエンダは、インディオ社会に依存する自給的な制度である。したがって、両者はまったく異なった制度である。エンコミエンダ制に制度的つながりをもつのは、コレヒミエント制であって、アシエンダはむしろエンコミエンダが依拠した伝統社会が解体したところから生まれてくるものである。しかし理念型として、あるいは制度的な両者のつながりは否定されずとも、現実型として、あるいは社会経済的な関連は否定されるべきではない。

さて本書は、以上の主張に基づいて現実型としてのエンコミエンダおよびアシエンダの連続・非連続を具体的な社会経済的な変化の中で捉えようとする試みであると言えよう。著者にしたがえば、理念型としてのエンコミエンダの成立条件は、インディオ住民が集中し、農業発展が見られる地域であるが、本書ではこの理念型に近いペルー・コスタ (沿岸地方) が考察の対象として選ばれている。資料については、コスタ中部のウアウラからイカにいたる七つの主要平野に見い出せる遺言書、売買契約書、公文書が使用されている。

以下に本書の構成を示し、各章の内容を要約的に紹介する。

序章

第1章 スペイン征服以前のコスタ社会

第2章 エンコミエンダ制

第3章 商品農業の開始

第4章 富農 (Gentleman-Farmer) の時代

第5章 アシエンダ制の確立

結論

(注1) わが国でも征服期からアシエンダの成立までの過程を法制史的に分析した佐藤明夫「植民地時代イスペイン・アメリカにおける土地所有制度」(西川大二郎編『ラテンアメリカの農業構造』アジア経済研究所1974年)、メキシコにおけるアシエンダの形成を生産様式との関連で分析した原田金一郎「メキシコ社会構成史研究についての一考察」(ラテン・アメリカ政経学会編『ラテン・アメリカ論集』11・12合併号1978年)、などの研究成果が見られる。

(注2) Lockhart, James, "Encomienda and Hacienda: The Evolution of the Great Estate in the Spanish Indies," *HAHR*, Vol. 49, No. 3 (August 1969).

(注3) ラテンアメリカ土地制度に関する学説を概

観するものとして、次の論文が有益である。Mörner, Magnus, "The Spanish American Hacienda: A Survey of Recent Research and Debate," *HAHR*, Vol. 53, No. 2 (May 1973).

(注4) Keith, Robert G., "Encomienda, Hacienda and Corregimiento in Spanish America: A Structural Analysis," *HAHR*, Vol. 51, No. 3 (August 1971)

II

序章においてまずアシエンダの概念が検討される。著者によると、アシエンダの一般的概念は農牧混合の大規模、非効率経営であり、中世荘園に類似する労働制度を有するもの、である。このアシエンダ像は中米高地およびアンデス地域についてはある程度妥当するが、メキシコ北部のランチョ、ペルー・コスタ南部の黒人奴隷によるブドウ栽培、キューバの大規模砂糖プランテーションなど地域により形態が異なる。著者は、この違いは制度の一般的特質ではなく、この種のタイプのアシエンダを生み出す地域の環境のなかに求めなければならないとする。こうした立場から、本書は地域社会制度としてのアシエンダの形成を論述するに際し、その第1章をスペイン征服以前のコスタ社会の分析に充てている。

すなわち第1章では、征服以前のコスタの支配構造、人口および地理的条件に言及し、征服以後の変化を測るための前提とする。著者はウィットフォークの水利社会論を援用しながら、コスタ社会は農業を基本にして、灌漑のコントロールを行なう集権的行政下に置かれ、その結果土地所有や私有財産が制限されており、また他の伝統社会に比し、狭い地域により多くの住民と富が集中されている、とその特徴を抽出する。1460～80年のインカによるコスタの征服・統一はこのような社会構造の上に築かれたものであり、支配層を除いて住民の生活には基本的な変化はなかった。後述するスペインによる征服も基本的にはインカと同じ支配形態をとった。しかしスペイン支配下において、根本的な変化がインディオ人口の減少とともに起こる。章の終わりにインカ支配下における主要平野のインディオ人口の概算が示される。たとえば、最大の人口を有するチンチャで18～30万、リマ＝パチャカマックで15～25万と算出されている。そしてスペイン征服以前にすでにコスタ人口の減少傾向が見られたと指摘する。

インカによる征服から半世紀後、1532年からスペイン人のコスタ征服が始まった。この征服を維持し、インデ

ィオを臣民として支配する制度が、第2章で扱われるエンコミエンダ制である。著者の定義によるとエンコミエンダは、クラカ（共同体首長）によって統轄された地域インディオ集団を、個々の征服者に貢納と賦役を供給するために分配するという制度である。当初はレパルティミエントの名で知られていたが、のちにエンコミエンダとしてスペイン法体系の中にとり入れられた。スペイン本国におけるエンコミエンダは、土地に対する権利および裁判権をもつが、ラテンアメリカではエンコメンデロの権力の強大化を恐れてこれらの権利は付与されず、また一代限りとされた。

1532年のピウラ市の建設を始めとして、これらのエンコメンデロを市民とするスペイン都市が1530年代に次々に建設された。これらの都市市民は、コスタに限らずシエラ（山岳地方）にもエンコミエンダをもち、また各地に分散してもっている場合も少なくなかった。著者はコスタにおけるエンコミエンダをインディオ貢納者数にしたがって次の三つに分類している。①大規模エンコミエンダ（1万以上）②本来的エンコミエンダ（5000～1万）③小規模エンコミエンダ（5000以下）。うち最大のもはエルナンド・ピサロ（Hernando Pizarro）が所有したチンチャのエンコミエンダで、3万人の貢納者を有していた。エンコミエンダ内では主に伝統的作物であるトウモロコシが生産されたが、次第に小麦、野菜、果物の栽培および牧畜が行なわれるようになった。これらの生産物は内部消費に向けられた。

著者は伝統的インディオ社会に依存したこのエンコミエンダ制が、1540年代中頃から変化し始めたとし、その最大の原因をインディオ人口の急激な減少による旧社会の解体に求めている。コスタ中部の貢納者人口は、開始期、1575年、1600年に各々8万5000、3441、1617と激減した。原因は伝染病、戦乱、移住による離村である。リマおよびイカ・ナスカ周辺では農業発展が見られ、例外的に離村は起こらなかった。

16世紀後半にはインディオ社会の解体に伴いスペイン王はレドゥクシオンなどを導入し、その再編に苦慮するようになった。エンコミエンダに対しても統制を強化し、インディオ貢納の徴収権は王の派遣するコレヒドールに移譲された。この結果エンコミエンダの権利は年金の受領に変わった。またエンコメンデロ自身もエンコミエンダより牧畜、農業経営による利潤に依存するようになった。こうして17世紀初までにコスタでは二つのエンコミエンダを残すのみとなった。以上本章は、エンコミエ

ングの形成から16世紀末のその解体までが、インディオ社会への依存からスペイン農業社会の自立にいたる過程として描かれている。

III

第3章では、旧社会解体の原因のうち経済的要因としての市場経済の発展が扱われている。この市場経済の発展は、ポトシ銀山の発見（1545年）等による銀の流通および48年の内乱に帰因している。この発展に既存のエンコミエンダは対応できず、ここに土地所有に基づく新しい企業の出現の余地が生まれた。それはスペイン都市の共有地（デエサ）における牧畜に始まったが、16世紀中期以降は次第に農業に重心が移っていった。このような農地に供された土地は、都市市民（初期はエンコメンデロ、のちには非エンコメンデロをも含む）に譲与された恩貸によるものであった。初期のものとしてはリマ市民に対するカルロス5世の勅令（1534年）による恩貸や、51年に禁止されるまでのリマ・カビルドによるものが有名であるが、最初の系統的な恩貸は副王カニエテによって行なわれたものである。恩貸の内容は家屋用敷地、庭園用地、耕作用地から成り、耕作用地における栽培は、当初エンコメンデロの追加所得源としてのみ考えられていた。しかしリマを中心とした小麦需要の増大に伴って、1550年以降耕作用地はチャクラと呼ばれる重要な農業企業に発展した。こうしてエンコメンデロ以外にチャクラをもつ階層が抬頭した。チャクラにおける労働力は、黒人奴隷およびエンコミエンダに属さないインディオが使用された。

以上のようにチャクラの重要性を強調した後、著者はエンコミエンダとアシエンダの関係に言及する。エンコミエンダはインディオの生産物を分配する制度であり、その規模は広域にわたり、数千の貢納者を包括する。それに対しアシエンダは、自ら生産する制度でエンコミエンダに比べ規模も小さく、200~300の労働力を有していれば大規模アシエンダとされる。またエンコミエンダ制の挫折とアシエンダ制の出現の間に時間的ズレがあるとして両制度間の非連続性の論拠を示している。しかし一方、さまざまな史料から個々のエンコメンデロがアシエンダの発展に重要な役割を果たしたのは明らかだとして、その実例を挙げている。つまり、所得減と政治的圧力の増大に直面したエンコメンデロは、補助的な企業に依存せざるを得なかった。彼らはその事業を拡大し、当初はチャクラのちにはアシエンダを創出したと結論づけ

ている。

第4章ではチャクラを中心とする農業発展が述べられる。著者はこの時期を富農（ジェントルマン・ファーマー）の時代と呼ぶ。スペイン王による非エンコメンデロに対する恩貸は、彼らの不満を解消して政治的安定を得ること、地域市場への農産物供給を安定的に行なうことを意図した。このような恩貸を受ける非エンコメンデロによって構成される小農業都市が1550年代に建設された（1556年カニエテ、62年チャンカイ、63年イカ）。しかしこの富農育成政策は一部の地域を除いて失敗に帰した。その理由はチャクラ所有者の資本不足、労働力不足（奴隷価格の高騰）および農産物市場の限定性にあった。そのためコスタ全体で16世紀末までにチャクラが次第に姿を消していった。その端的な例として著者はカニエテ平野を挙げている。カニエテ平野では1550年代に25~30のチャクラが存在していたが、10人の土地所有者に吸収され、1630年までにアシエンダが成立した。

一方、農業利潤の高いリマ周辺の小麦生産チャクラおよび南部イカ周辺のブドウ生産チャクラは、地域の農業企業の主要タイプとして残った。チャクラにおける主要労働力は黒人奴隷でリマ平野では、4~5万を有していた。このように一般に豊かな地域においてチャクラの発展が見られるとして、アシエンダ制の発展がコスタにおける唯一の基本パターンではないと指摘した。

第5章ではアシエンダ成立にいたる土地・水利所有権の獲得について論じられている。リマを除く北部ではアシエンダが支配的で、主に旧エンコメンデロおよび政府官僚の所有であった。そしてその土地拡大は、生産および利潤追求を動機とするものではなく、ステイタス・シンボルの獲得に基づくものであった。そして土地に対する競争が低かったため、その拡大は容易であったと指摘する。

一般に16世紀のスペイン人には土地獲得の方法として次の三つがあったとする。①ペルーにおける王の代理人からの恩貸、②インディオ個人（のちにはスペイン人所有者）からの購入、③インディオ共同体（のちには王室）からの購入である。そして北部では恩貸ならびに共有地の競売が一般的であり、イカおよびリマ周辺ではインディオ共同体とインディオ個人からの購入が主であった。また水利権については、コスタにおいてむしろ土地に対する支配より重要で、土地制度の変化に伴い、それ以上に苛酷な水利権争いが起こったと述べている。

結論部分では、コスタにおけるエンコミエンダの衰退、

チャクラの形成、アシエンダの出現にいたる過程を再論し、さらにラテンアメリカ全体への一般化を試みる。スペイン人はインディオ社会が強大で豊かな地域ではエンコミエンダ制あるいは他の間接的制度を採用し、それが弱体である所でチャクラ、アシエンダ、プランテーションが導入されたとし、その選択は次のような地域的な条件によるとした。①インディオ社会の生産性、②スペイン人移民数、③農産物価格の水準、④労働力価格。エンコミエンダについては、次の二つの類型を想定する。一つはメキシコ、アンデス地域の大規模半封建エンコミエンダで、そこでは伝統的の制度が温存され、インディオ貢納・賦役をつうじて非エンコメンデロに対しても富の分配が可能であった。他方は西インド諸島、中米、チリに見られる小規模エンコミエンダで、インディオ人口が稀薄なためエンコメンデロの再生産のみ可能というものである。このエンコミエンダ制の衰退は、征服後のインディオ人口の減少に起因するもので、急激な人口減が見られないメキシコおよびペルー（コスタを除く）では比較的長期にわたりエンコミエンダ制が残存したと指摘する。

一方、農産物市場の発展した地域、ポトシ鉱山をひかえたコチャバンバ、メキシコ市周辺、北部鉱山向けのバヒオ、コスタ南部、リマ周辺でチャクラが発展し、このような有利な経済条件を持たないコスタ北部、中米などの地域においてアシエンダが拡大したとする。さらにアシエンダを、奴隷労働に基づくプランテーション型とインディオ労働による荘園型およびランチョ（牧畜アシエンダ）に分類する。荘園型アシエンダについては、その土地拡大は耕作のためではなく、ステイタス・シンボル、廉価な労働力の確保、競争の排除という動機によっており、劣悪な条件から生まれたマージナルタイプとして見るべきだとしている。

最後にスペイン植民地支配の性格に触れ、それは既存の経済的基盤の上に間接的な支配システムをつうじて行なわれたとする。そしてインディオがもはやその基盤を維持できなくなったとき、その再編が起こるとして、征服時のエンコミエンダの成立からアシエンダ出現の過程を要約した。

IV

本書はエンコミエンダからアシエンダにいたる時期を、単径的な移行としてではなくチャクラを媒介とする移行過程として描いている。すなわち、本書のアシエン

ダ起源論に対する功績は、きわめて実証的にチャクラを抽出したことにある。しかし本書にとってもっとも重要な用語であるチャクラに対し、著者は必ずしも明確な概念規定を与えていない。著者によるとチャクラとアシエンダの間の差異は曖昧なものであって、チャクラは50ファネガダス（359エーカー）以下、アシエンダはそれ以上と規模的に両者を区別するのみである。またこれと関連して、チャクラの担い手を旧エンコメンデロ、非エンコメンデロを一括して富農（ジェントルマン・ファーマー）と呼び、きわめて無限定的に使われている。アシエンダの発展でない、別の農業の発展の道をチャクラに見い出そうとするならば、その担い手の問題を含めてより一層理論的な枠組の中で捉えなおすことが必要であろう。

またブドウに次いで商品価値の高いのは砂糖であるが、第4章においてイエズス会経営の砂糖アシエンダの発展が描かれている。ここでは砂糖生産のために巨大な資本と労働力を必要するという説明がなされている。著者はアシエンダをチャクラの殊外形態として捉えてきたが、ここでは発展形態として位置づけているのかどうか、明確ではない。同じような疑問は、ムエルネル (Magnus Mörner) の本書書評においても出されている。「アレキパにおいて、ブドウ生産はキースが描くイカにおけるようにチャクラ構造を維持するのに十分ではなかった。1600年頃大土地所有の新しいグループが出現した」(注1)。

以上のような理論的問題は残るとしても、本書はアシエンダの形成に関して、コスタ中部という比較的広い地域を対象とし、実証的研究に基づいて一定の枠組を提供した点で評価されよう。

(注1) *HAHR*, Vol. 57, No. 4 (Nov. 1977), pp. 727-729

(上智大学大学院 辻豊治)